

Science Fiction and Ectogenesis.

サイエンス・フィクションと体外発生

Dr. Anna McFarlane

Q. 自己紹介をお願いします。

バックグラウンドは、SFと医療人文学。現在、流産の描写に関する『Bleeding Genres』という本の執筆を進めている。このトピックに興味を持ったのは、自身の個人的な流産体験があったから。また、妊娠中の友人の何人かが、胎内での赤ちゃんの目に見える動きを『エイリアン』のようなSF映画のシーンに例えたことを思い出したから。これは、妊婦の描写がしばしば圧倒的に幼児化されるとは対照的である。

Q. Ectogenesis に関するこれまでの代表的な論文について、概要を教えてください。

SFにおける体外発生の描写は、3つの時代に分けることができる：

- 20世紀初頭。これは優生学と関連しており、生殖が完全に自動化された未来の描写である。社会にとって重要な利点は、遺伝子選択によって「より優れた人間」を生み出すことである。これは、Aldous Huxleyによる小説『Brave New World』の時代でもある。ハクスリーは、優生学に関するこのような広範な話題に乗っかって、優生学に対するアンビバレントなスタンスでディストピアを提示した。
- 1970年代中期。特に、シュラミス・ファイアストンの『性の弁証法』は重要な作品である。妊娠という重荷（すなわ

ち、女性抑圧の核心であると信じられている生物学的プロセス）から女性を解放する手段として、体外発生が提示されている。しかし、この作品はまた、現体制の状態が、女性の身体をさらに支配するためにこの技術が使われることになりかねないことを強調している。Marge Piercyの『時を飛翔する女』(Women on the Edge of Time)もまた、この考えを探求している。この作品では、性別が流動的で、重要ではなく、性別による差別がないユートピア社会が描かれている。にもかかわらず、小説の主人公は、子供を妊娠しなくなったことで、女性は自分たちの経験の一面を失ったと考えている。

- 現代のテキスト。これは自分の論文『NHSにおける体外発生：21世紀の英国SFにおける生殖と民営化』(Ectogenesis on NHS: Reproduction and Privatization in Twenty-first-Century British Science Fiction)で論じた。主な作品には、Helen Sedgwickの『The Growing Season』とKira Peikoffの『Baby X』がある。これらは、出産と身体組織（つまり、赤ん坊だけでなく、その身体の一部も）の商品化の可能性について述べている。自分の論文では、これらの描写は、民営化や医療における不平等に対する不安を反映したものであり、現在の英国における国民保健サービス(NHS)の議論の中心となっていることを指摘している。NHSは公的なものであり、誰でも無料で利用できるはずだが、民営化して人々にお金を払わせようとする動きが一貫してある。論文ではまた、NHSの「郵便番号くじ」を考察している（例えば、どこに住んでいるかによって、ART治療に対する助成金の額が決まる）。論文では、妊娠出産を体外で行うため、そして、妊娠と出産にとって、政治と経済がいかに重要であることを示すために、体外発生を用いる。

Q. サイエンス・フィクションで描かれている人工子宮について教えてください。

Aldous Huxley は『Brave New World』の中で、ベルトコンベアーの描写、つまり巨大な金属製の女性からベルトコンベアーが出てくる描写を使った。これは、すべてが均一である生産自動化ラインの概念に基づいている。これは非常に均質な社会を表している。

Marge Piercy は『時を飛翔する女』で、すべての赤ん坊がへその緒をつけたまま浮かんでいる巨大な水槽を描いた。これは、より平等でユートピア的なコミュニケーション社会を表している。

『成長する季節』(Growing Season)のような現代的なテキストでは、体外受精は、持ち歩いたり体に括りつけたりできるバッグの中で行われ、実際の医学的発展(子羊の胎児を妊娠させるのに使われるバイオバッグなど)とかなり一致している。著者の Helen Sedgwick には科学者としての経歴があり、近い将来、利用できる可能性のあるものを本書のベースにしている。胎児は妊娠中に音にさらされる(声や動きなど)、暗闇の中に置かれる必要があるという指摘があるが、これはウェアラブルバッグのコンセプトと一致する。以前の描写と比較すると、ウェアラブルバッグが最も現実的であることは間違いない。

Q. 現実社会で人工子宮の ELSI について考える際、サイエンスフィクションは参考にすべきでしょうか。

サイエンス・フィクションが私たちの足を引っ張る可能性があるという議論がある。例えば、生命倫理学者の Evie Kendal は、SF で描かれる未来的技術がいかにかたちをうんざりさせるかについて語る。彼女は、『マトリックス』に言及する。ネオが首にチューブを入れられ、ポッドの中で白いベトベトに覆われた人間電池となっている。このテクノロジー

は有用である可能性があるにもかかわらず、このようなイメージは人々を遠ざける可能性がある。

それに対して自分は、SF の描写は技術の倫理的、法的、社会的な意味を考える上で価値があると考えている。現在、「ヒト生殖の未来」という学際的なプロジェクトに取り組んでいるが、プロジェクトリーダーが SF の検証は未来を考える上で貴重で有用なツールだと考えているため、協力することになった。

Q. 人工子宮は、今後どのように開発が進むと予想しますか。その時、代理出産(自然妊娠出産)や子宮移植はどのようにになりますか。

Anne Charnock 著『Dreams Before the Start of Time (時の始まる前の夢)』は、検討に値する作品だ。この作品では、体外発生は広く利用可能であり、「より安全な選択肢」として描かれている。そして、自然妊娠は劣ったものであり、子どものためにならないと判断される。人々の妊娠スタイルや選択などに対する社会の判断をドラマチックに描いている。この本には、(ディストピア的ではあるが)女性がほとんどバービー人形のような存在に貶められるという描写がある。女性は体をできるだけ若々しく、美的に保とうとあらゆる努力を払っており、妊娠は老いて使い古されることと結びつけられている。女性がライフサイクルの中でどのように評価されるのか、興味深い考察だ。

子宮移植に関する文献をあまり思い出すことができない。これは、子宮移植がまだ『正常な妊娠』に関係しており、SF が描こうとしていないからだと推測する。しかし、トランスの生活や家族作りに関する言説が増えるにつれ、そのような描写が増えるかもしれない。

代理出産もすでに実現しているものなので、SF 文学では描かれていない。とはいえ、Octavia Butler の短編小説『Blood

Child』は、エイリアンに植民地化された社会で暮らす少年を描いている。人間の男性の腹部にエイリアンの卵子が埋め込まれ、卵子が成熟すると手術で取り出される。これはある意味、代理出産に例えられるかもしれない。エイリアンと人間の関係は、思いやりがありながらもアンビバレントな関係として描かれており、それはしばしばアメリカにおける奴隷制度と人種関係の遺産を反映したものとして読まれる。

Q. 生殖の医療化(medicalization)や国家による生殖コントロールが加速しますか？人工子宮は、どのように利用されるでしょうか？

『Brave New World』の場合、すべての赤ん坊の誕生を担当する世界統治機関が存在する。これは、台頭する大国や国家統制に対する当時の恐怖を反映している。その後の作品では、より集団的な描写が多くなったが、現代の文章ははるかに個人主義的である（例えば、人工子宮へのアクセスは全員がお金を払わなければならない、赤ちゃんはそれぞれ別の容器で個別に妊娠させられる、など）。これは、国家が何の規制もなく資本主義の支配を野放しにすることへの不安を反映している。

Kameron Hurley の『星は軍団』(The Stars Are Legion)は、物質的ナショナリズムを扱っている。この小説の舞台となる宇宙船は、船内に住む女性たち（男性はいない）と同調しているほとんど生き物のようなものとして描かれている。船を修理するために必要なものがあれば、女性がそれを妊娠し、誕生させる。これは、国家を維持するために女性が引き受ける危険な仕事を反映している。

Q. 人工子宮に関して、フェミニストの議論で注目すべきものがあれば教えてください。

Fran Bigman の論文“Pregnancy as protest in interwar British women's writing: an antecedent alternative to Aldous Huxley's Brave New World”の分析は興味深い。

人工子宮が解放的な技術なのか、それとも制限的な技術なのかについては、様々な議論がある。最初の体外受精児が誕生した際にも、フェミニストから多くの反発があった（医療化、妊娠のさらなる男性支配などに関して）。

最近では、フェミニストの Sophie Lewis が代理出産について書いており、出産した人はその赤ちゃんにとって他の人よりも重要な存在であると述べている。彼女はまた、バイオバッグにも言及して体外発生について語り、アメリカにおける中絶の権利の低下を背景に、人工子宮に対して懐疑的である。彼女は、このような技術は中絶における「生存可能性(viability)」の概念に悪影響を及ぼし、生存可能性の規定を無意味なものにしてしまうかもしれないと述べている。

Q. 子供の利益や福祉の点から見て、この技術はどう評価されますか？誰か議論している研究者はいますか？

Anne Charnock の『Dreams Before the Start of Time』は、物語の中でさまざまな世代が描かれているので、とても役に立つ。両親の決断を見た後、人生のさまざまな段階における子供（匿名の精子提供を選んだ人、その後、父親が誰なのか悩む子供など）を見ることになる。この小説が大成功を収められなかったのは、描かれている人間関係が現実社会の人間関係を反映しすぎているからである。SF小説として、（親のことを気にしすぎる）子供たちにとって、想像される未来についての描写が保守的すぎたのかもしれない。子供たちが可能性を広げるには不十分だったということ。

今後のSF作品において、子供の視点からの描写をさらに増やしてほしいと考えている。

Q. サイエンスフィクションに人工子宮はしばしば描かれていますが、生殖(妊娠出産)から解放されることは人間/女の究極の欲望なのでしょうか？ それとも男性の支配を強化しますか？あるいは性は意味がなくなる社会になりますか。

多くのSF小説では、セックスはより娯楽的なものになっている。例えば、

『Brave New World』では、一夫一婦制の関係は異常であると描かれている。セックスは快楽主義的であると同時に、コミュニティ全体とのつながりの手段としても機能している。共産主義に対する一抹の不安がそこにはあった。つまり、すべての人の面倒を見なければならないような共産主義では、一人の人を愛することは許されないのではないか、ということ。『時の果ての女たち (Women On the Edge of Time)』は、継続的な一夫一婦制に触れ、結婚制度に挑戦しており、『時の始まる前の夢 (Dreams Before the Start of Time)』はオルタナティブな関係と性のモデルに触れている。

人工子宮が生殖からの自由とイコールかどうか、テキストは両義的だ。女性の「特別な役割」が分かち合われるとき(例えば、男性が授乳の役割を引き受けるとき)、喪失感を示す表現もある。最近のテキストでは、妊娠の経験に対する郷愁がある。あるものは、体外発生を抑圧からの解放としてではなく、抑圧が進んでいく道を拓くものとして描いている。たとえば、女性を抑圧するための虐待関係における支配手段として。また、トランス女性に適した子宮移植など、より多くの人々が妊娠を経験したいと望むかもしれないという考え方もある。

「妊娠」という概念は、母親になるための身体的、感情的、ホルモンの、社会的な移行を指す(例えば、母親になることで脳がどのように変化するか)。妊娠の変容力に関するこのような考え方は、妊娠から「解放」されることがポジティブなこととしてだけ描かれるのではない理由の一部かもしれない。

Q. その他、現在、子宮に関するテクノロジーについて考えていること。これから研究したいことは？

前述のように、現在、ランカスター大学で「ヒト生殖の未来」プロジェクトに携わっている。

現在、近刊予定の『Critical Futures.』の一章を執筆中。そのため、未来についてのさまざまな考え方が、現在の私たちの行動や振る舞いをどのように導いているのかを考えることになった。例えば、バイオバッグという考え方が、現在の私たちの妊娠に対する考え方をどのように変えるのか、つまり、体外発生について考えることが、現在の私たちが妊娠・出産の問題について批判的に考える上でどのように役立つのかを観察するのは興味深い。

妊娠は文学ではあまり描かれませんが、描かれる場合はエイリアン風の描写やかなり暴力的な描写が多い。おそらく、こうした未来のテクノロジーについて考えることは、妊娠がすでにどのように実践されているのか、妊娠がいかに困難と隣り合わせなのか、妊娠が私たちを取り巻く世界とどのように絡み合っているのかを考える助けになるだろう。

マクファーレン博士は、インタビュー相手としてブリティッシュ・コロンビア大学のヘザー・ラティマー博士を推薦している。

Q. 人工子宮の受容性に関して文化的な差異はあると思いますか？

調査したテキストは英国のもので、NHSに基づいている。この文脈では、万人に適した技術は一つであるという考え方が“普通”である。

大規模な公衆衛生システムを持つ技術社会は、何かを大規模に展開するための既存の枠組みがあるため、体外発生をサポートするのに適しているかもしれない。したがって、イギリスや日本のような国は、おそらくこのような技術がかなり早く「普通」になることができる場所だ

ろう。対照的に、アフリカ諸国、プエルトリコ、定期的な停電のある国などは、技術面でもインフラ面でも苦戦を強いられるだろう。技術自体は、特定の国のニーズやプロフィールに合うよう成型することができる。例えば、国営の体外発生、コミューンの体外発生、資本主義のネオリベラルの体外発生などが考えられる。

直観では、アメリカは医療保障の格差と保守的な宗教団体の強さがあいまって、大規模な技術導入には苦勞するだろう。一部の宗教では、出産をイブが毒リンゴを食べた罰、つまり原罪に対する罰としている。妊娠にこのような意義があるため、このような技術を導入したがる可能性はある。

(2024年5月)

Dr. Anna McFarlane

2022年からリーズ大学で医療人文学の講師。ランカスター大学で、ウェルカム・トラストが資金提供する「ヒト生殖の未来」プロジェクトの客員共同研究員をつとめる。

研究テーマは、トラウマ的妊娠の表象におけるファンタジックなモチーフやジャンル（SF、ファンタジー、ホラーなど）について。関心領域は、医学人文学、ジェンダーと身体、映画、現代文学、ライフ・ライティング、文学における人工知能（AI）とシリコンバレーの表現、イノベーションとイデオロギーとしてのSFなど。

論文:

McFarlane A. 2023. Reproductive Loss in the Anthropocene: Paul McAuley's *Austral*. *Science Fiction Studies*. 50(2) : 233-250.

McFarlane A. 2022. Posthumanism Before Posthumanism. *Science Fiction Studies*. 49(3):558-562.

McFarlane A. 2022. Ectogenesis on the NHS: Reproduction and Privatization in Twenty-First Century British Science Fiction. In: *Technologies of Feminist Speculative Fiction Gender, Artificial Life, and the Politics of Reproduction*.